豊かな時代に心の渇き

鳥取ガス株式会社
取締役社長　児嶋祥悟

日本は、歴史的な大転換期を迎えている。政治は方向を見失い、経済は長期的な構造不況に陥り、金融機関は果てしないバブルの処理に追われ、経済の運営やシステムは大きく揺らいでいる。半世紀にわたる国土開発と飽食と浪費で、戦後日本を支配してきた価値観は崩壊した。

二十一世紀の日本を担う青少年の心や躾（しつけ）も永らく疎（おろそ）かにされ、その結果は深刻な精神の空洞化となって世紀末的な殺人教団を生んだ。物は豊かになったが心は貧しく、なお置き去りにされている心の教育。どんなに物で満たされようと、満たすことのできなかったのは心。現代人は、心の飢えと渇きのどん底にいる。

昔、中国に「宥坐（ゆうざ）の器」というものがあった。空（から）の時は傾き、水が半ばまで注がれると真っ直ぐな正しい姿勢を保ち、それ以上にいっぱい満たされると覆るので、治政者は宥坐の器を座右に置き、心の戒めにしたという。「足（たる）を知る」哲学や倫理観こそ、現代に最も求められているのではなかろうか。